

岐阜県岐阜市方言の原因・理由表現

山田 敏弘

(1)はじめに

ここでは、岐阜県岐阜市方言の原因・理由表現について報告する。報告事項は、「原因・理由表現 共通調査項目」に掲載された項目の内、接続助詞の働きをするものすべてと、接続詞に相当する表現の一部である。

岐阜県岐阜市は、岐阜県中部、濃尾平野の北端に位置し、古来、中山道の宿場町として栄えた加納宿と、戦国時代に織田信長によって基礎が拓かれた金華山麓の岐阜を核に発展してきた岐阜県第一の都市である。近年は名古屋への交通の便の良さから、中心市街地の空洞化が進むとともに、名古屋市のベッドタウン化も著しい。

岐阜県方言は、おおむね美濃方言と飛騨方言とに分かれるが、県内での差は大きくないと言われる。一方、岐阜市以西にはアスペクトのヨル・トルの区別がないのに対し、美濃地方中部・東部および飛騨地方には、これらの区別が見られることや、岐阜市あたりまでは、名古屋的な「イキヤー・ミヤー」という親愛的な命令形を用いるのに対し、美濃地方では広く「イキンサエー・ミンサエー」が聞かれ、中北部の郡上と飛騨地方では「イキナレ・ミナレ」のような命令形が用いられるなど、圏域ごとに特徴ある表現も少なくない。

(2)調査の概要・文字化について

調査は、今回、1965年生まれ岐阜市出身の山田本人の内省によるものを示す。ただし、実際に同年代以下に対して用いることばではなく、老年層と話す場合で特に老年層話者とことばを合わせた場合に用いると考えられることばを採用した。

ガ行音については、弱い鼻濁音であると認識しているが、破裂音や摩擦音になることもある。これらは音素的に対立しないため、特に鼻濁音であるか非鼻濁音であるかの区別はせず「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」で示す。特に格助詞の「ガ」はさらに弱化して、「センダクモンガ」であれば「センダクモンア」のように子音がほとんど聞こえない場合もあるが、意識としては「ガ」と発音していると思われることから、「ガ」と示すことにする。

母音について、連母音[ai]の融合は、尾張方言と共通する現象であるが、尾張方言の[æ:]ほど広くない[ɛ:]であると考えられる(ただし揺れもある)。ここではア段のカナに「エー」を添えて表す。

1 「から」と「ので」の用法

1-1 事態の原因(接続調査を兼ねる)

1-1-1 マエーニチ アメガ フルデ センダクモンガ {カワカヘン/カワカン}。

1-1-2 マエーニチ アメヤデ センダクモンガ {カワカヘン/カワカン}。

1-1-3 テンキガ エーデ センダクモンガ ヨー カワク。

1-1-4 コノヘヤワ シズカヤデ シゴトガ ハカドルワ。

1-1-5 ユンベワ ギョーサン アメガ フッタデ ミズタマリガ デキテマッタ。

1-1-6 コドモヤッタデ ワカランカッタ。

注:「コドモヤデ」も言えるだろうが、「ヤッタデ」のほうが言いやすい。

1-2 行為の理由(後件のモダリティ制限の調査を兼ねる)

- 1-2-1 タイチョー ワルイーデ シゴト ヤスンドルンヤワ。
 注:「コトニシタ」は報告で「コトニシタンヤテ」などにしないと使いにくい。
- 1-2-2 タイチョー ワルイーデ シゴト ヤスムワ。
- 1-2-3 クラナッタ {デ/ニ} ツラッテ カエロマイ。
- 1-2-4 アカンボガ ネットル {デ/ニ} シズカニ シヤー。
- 1-2-5 アカンボガ ネットル {デ/ニ} シズカニ シテマエンカナ。
- 1-2-6 アメ フル {デ/ニ} カサ モッテキヤーヨ。

1-3 判断の根拠

- 1-3-1 ホシガ デトルデ アシタモ エー テンキヤローナ。
- 1-3-2 ユビワ ハメトルデ ケッコン シトルンヤナイカナ。
- 1-3-3 セキモ デルシ ネットッポイデ カゼ ヒータカシャン。
- 1-3-4 サッキ シンブンハイタツノ オトシタデ マー ゴジ スギトラヘンカ。

1-4 発言・態度の根拠

- 1-4-1 アブナイ {デ/ニ} コノカワデ アソビヤースナ。
- 1-4-2 カゼ ヒクトイカンデ マット キテ デカケヤー。
- 1-4-3 キョーノ シゴトワ ゼンブ オワッタデ マー カエロマイカ。

1-5 理由を表さない用法

- 1-5-1 スン モドッテクル {デ/ニ} ココデ マットッテ。
 注:「マッテイテ」も言う。
- 1-5-2 イッペンデ エーデ ピラミッド ノボッテミタエーナオ。
- 1-5-3 タノム {デ/ニ} カネ カシテ。
- 1-5-4 クルマ ヨンダル {デ/ニ} スン ビョーイン イキヤー。
- 1-5-5 ワッチノ サェーフ ツクエノ ウエニ オイタルデ トッテキテマエンカナ。

1-6 原因・理由節の述語用法(XはYからだ)

- 1-6-1 A:キモチ ワルイー。
 B:アンナニ ノムデヤワ。
- 1-6-2 A:キョー デパート コンドルヤン。
 B:ニチョービヤデヤワ。
- 1-6-3 A:サイキン タロー キゲン ワルインヤテ。
 B:ジローノ コトバッカ ホメルデヤワ。
- 1-6-4 A:サイキン タロー キゲン ワルインヤテ。
 B:ジローノ コトバッカ ホメルデカシャン。
- 1-6-5 A:サイキン タロー キゲン ワルインヤテ。
 B:ジローノ コトバッカ ホメルデカモシレンゾ。
- 1-6-6 A:ヒッコシシテカラ パソコン チョーシ ワルイミテヤワ。
 B:ソンナモン ハコンドルトキニ オトラカエータデニ キマツトルテ。

1-7 従属節内のモダリティ表現

1-7-1 伝聞・推定表現など

- 1-7-1-1 (天気予報によれば) ヨーサ アメ フルゲナデ ハヤメニ カエロマイ。
 1-7-1-2 (天気予報によれば) ヨーサ アメ フルゲナデ ハヤメニ カエロマイ。
 1-7-1-3 (雲行きを見ていると) ヨーサ アメ フリソーヤデ ハヤメニ カエロマイ。
 1-7-1-4 ネット アルミタイヤデ ハヤメニ カエーッテッタ。
 1-7-1-5 アメ フルカモシレンデ カサ モッテキタ。

1-7-2 推量表現

- 1-7-2-1 アメ フルヤロ {デ/ニ} カサ モッテキヤー。
 注:「ヤロ {デ/ニ」のように推量形接続助詞「デ」(「ニ」)を続けることもできるが、「アメ フルヤロ。カサ モッテキヤー。」のように、切るほうが自然。
 1-7-2-2 ヤマデワ ギョーサン ユキ フッタヤロデ ナダレガ オキンカシヤン シン
 パェーヤワ。
 1-7-2-3 タェーシタ フリニワ ナラヘンヤロデ カサ モッテカンデモ エーワ。
 1-7-2-4 ソトワ サムィーヤロデ マット キテコ。
 1-7-2-5 コノ マンマヤト アシタモ アメヤロデ エンソクワ チューシン ナルンヤナイ
 カ。

1-7-3 丁寧表現

- 1-7-3-1 チョット ハナシガ アリマスンデ コッチィ キテクンサエ。
 1-7-3-2 アブナイデスデ カケコミジョーシャワ ヤメテクンサエ。
 1-7-3-3 イナカカラ リョーシंगा キトリマスモンデ ハヤメニ カェーラセテマッテモ
 エーデスカ。

1-8 文末用法

1-8-1 倒置

通常、ひとつの文の倒置表現にはなりにくい。下記は、むしろ、2つの文としての発話。
 また、この場合、「ニ」はやや不自然。

- 1-8-1-1 ココデ チートバカ マットッテクレンカナ。スン モドッテクル{デ/ニ}(エカ)。
 1-8-1-2 ゴセンエン カシテマエンカナ。 ゲツマツマデニワ カェース {デ/ニ} (エ
 カ)。
 1-8-1-3 エキマデ ムカエニ キテクレヘン? ヒチジニ ツク {デ/ニ}。

1-8-2 終助詞的用法

単独で「デ」で言いさすことはできなくはないが、伝統的には「エカ」を付するのが一般的である。

- 1-8-2-1 アトデ マッペン デンワスルデ エカ。
 1-8-2-2 チョット デカケテクルデ。 オヤツワ レーゾーコニ プリン ハェーットルデ エ
 カ。
 1-8-2-3 オマハンノ コタ {ワスレーヘンデ エカ/ワスレーヘンニ}。
 1-8-2-4 オトーサンニ イーツケタルデナ。

- 1-8-2-5 ゴジマデ エキマエノ キッサテンニ オルデ エカ。
 1-8-2-6 チョット スーパーマデ カイモンニ イッテクルデ エカ。
 1-8-2-7 ヒミツ バラシタラ タダジャ スマサヘンデ エカ。

2 「のだから」に相当する「んやで」の用法

2-1 「で」との相違

- 2-1-1a ジカン アラヘンデ {イソイダンヤ/イソゴマイ/イソギャー}。
 2-1-1b ジカン ナインヤデ {×イソイダンヤ/イソゴマイ/イソギャー}。
 注:「アラヘンヤデ」とは言わない。
 2-1-2 テンキ {?エーデ/ヨカッタデ/×エーンヤデ/×ヨカッタンヤデ} サンポニ デカケタ。
 2-1-3 マエニチ アメ フル {デ/×ンヤデ} センダクモン カワカヘン。
 2-1-4 ユンベ ドエレー アメ フッタ {デ/×ンヤデ} ミズタマリ デキトル。

2-2 意味・用法(接続調査を兼ねる)

2-2-1 確かな事実とその当然の結論

- 2-2-1-1 コンナケ ガンバッタ {デ/ンヤデ} コンダ ウマイコト イクハズヤワ。
 2-2-1-2 ダエージナ ハナシ シトル {デ/ンヤデ} コドモワ アッチ イットリャー。
 2-2-1-3 コッチワ シンケン {ヤデ/ナンヤデ} カラカワントイテクンサエ。
 注:相対的に、裸の「デ」は「ンヤデ」よりもすわりがやや悪いが、「?」ほどでもない。

2-2-2 聞き手に関する情報—行動要求・認識要求

- 2-2-2-1 ワカエー {?デ/ンヤデ/?ニ/ンヤニ} イッペン シツパエーシタクライデ クヨクヨシヤースナ。
 注:「アンタワ」を最初に付けると、「デ」「ニ」の座りがよりよくなる。
 2-2-2-2 ジュケンセー {?ヤデ/ナンヤデ/?ヤニ/ナンヤニ} マット チャント ベンキョーシヤー。
 注:2-2-2-1と同様に、「アンタワ」を最初に付けると、「デ」「ニ」の座りがよりよくなる。
 2-2-2-3 セッカク リューガクスル {×デ/ンヤデ/×ニ/ンヤニ} チャント ベンキョーシテキヤーヨ。

2-2-3 後件が聞き手の利益になる事柄の場合

- 2-2-3-1 ジカンワ マンダ アル {ンヤデ/ンヤニ} マット ユックリ シテキヤー。
 2-2-3-2 チャンスワ マンダ アル {ンヤデ/ンヤニ} ヒズ ダシャーテ。
 2-2-3-3 マー ジッキ タエーイン デキルンヤデ マー チョットノ シンボーヤナイカ。

2-2-4 倒置

- 2-2-4-1 カラダニ キオ ツケンサエーヨ。 マー ワカ ナイ {ンヤデ/ンヤニ}。
 2-2-4-2 ジブンニ キメンサエ。 コドモヤナイ {ンヤデ/ンヤニ}。
 注:「ジブンニ」は「ジブンデ」でもよい。
 2-2-4-3 ソリャ シンパエースルテ。 オヤナンヤデ。

2-2-5 終助詞の用法

2-2-5-1 ウチ ゼッター アノ ヒトト ケッコンスルンヤデ。

2-2-5-2 コッチガ アマエ カオ スルト スン チョースイテマウンヤデ。

2-2-5-3 アノジンワ ホットニ サケグセ ワルィーナオ。

注：「ンヤデ」はふつう使わない。「ジン」は「仁」。

3 接続詞「やで」「やもんで」「ほんなもんやで」の用法

岐阜は関西系の「～や(で)」を使う地域なので、本来、裸の「やで」は使いにくい感じがするが、実際、若年層では結構使われている。また、「やで」と「(ほん)なもんで」「で」、さらに「やもんで」は、少しずつ意味・用法が異なる点をもつ。

3-1 接続助詞「から」の文に言い換えられ、前件・後件が同一の話し手によるもの(接続詞「で」に言い換え可能な用法)

3-1-1 ココントコ マエーニチ アメ フットル。 {?ヤデ/ヤモンデ/ホンナモンデ} センダクモン チョットモ カワカヘン。

注：「ヤデ」は若年層には多用されるが、伝統的な形式としては不自然である。

3-1-2 マー サンジップンシカ アラヘンデ ハヨ オキンサエー。

注：ふつう、切らない。切っても、接続助詞は入れない。

3-1-3 スン モドッテクルデ ココデ マットッテ。

注：ふつう、切らない。切っても、接続助詞は入れない。

3-2 接続助詞「から」の文に言い換えられ、前件・後件の間に話者交替があるもの

3-2-1 相手の発話中の事態Pを受け、それから導かれる帰結Qを述べるもの

3-2-1-1 A：サエーキン ヨー アメ フルナオ。

B：ホントヤデ。 ナモンデ センダクモンガ カワカンシ コマットルンヤテ。

3-2-1-2 A：キョー アメ フルンヤッテ。

B：ホンナラ カサ モッテキヤー。

注：「だから」にあたる接続詞は使わない。

3-2-2 聞き手に結論を求めるもの

3-2-2-1_1 A：コマッタナー。 アメ フッテキテマッタゲー。

B：{デ (/ホンデ)} ナンナノ。

3-2-2-1_2 A：コマッタナー。 アメ フッテキテマッタゲー。

B：{デ (/ホンデ)} ナニ？

3-2-2-1_3 A：コマッタナー。 アメ フッテキテマッタゲー。

B：{デ (/ホンデ)} ？

3-2-3 相手の発話中の事態や発話時の状況Pが、既知の事態Qの原因・理由であると認定するもの

3-2-3-1 A：ジコデ デンシャ オクレトルゲナナ。

B：ホーカナ。 ソンデ ミンナ コンノヤ。

3-2-3-2 コレヤデ レンキューニ デカケタナインヤワ。

3-2-3-3 アー ナルデ レンキューニ デカケンホーガ エーンヤテ。

注：「アレヤデ」とは言いにくい。

3-2-4 相手の発話中の事態や発話時の状況Pが、既に行った発話行為Qの理由であると認定するもの。

3-2-4-1a {ダカラ／ホレヤデ} ヤメトケッテ イッタンヤテ。

b {ダカラ／ホレヤデ} ヤメトケッテ イッタヤロ？

c {ダカラ／ホレヤデ} ヤメトケッテ イッタヤン。

注：a～cとも「ヤデ」も使う。特に若年層。

3-2-4-2 ダカラ オケッテ イッタヤン。

注：「ヤデ」も使う。特に若年層。「オク（措く）」は「止める」の意味。

3-3 接続助詞「から」の文に言い換えられず、「あなたもわかっているはずなのに」という話し手の態度を表すもの

3-3-1 「あなたが…と言うから私は～と言う」という発話行為間の因果関係があるもの

3-3-1-1 A：サッキガタ タノンドイタ シゴト チャント ヤッテクンサエーヨ。

B：ワカトルテ。 キョージュエニ ヤットクワ。 イマワ チョット イソガシテ
ヨー ヤランノヤテ。

A：アシタマデニ ヤットイテクンサエーヨ。

B：ダカラ ヤットクッテ イットルヤナイカ。

注：「ヤデ」も使う。特に若年層。

3-3-1-2 A：キョーワ タノミゴトガ アッテ キタンヤ。

B：ナンヤナ。 ハナイテミンサエー。

A：ダエージナ コトナンヤテ。

B：ダカラ ナンヤノ。 ハナシャーッテ イットルガネ。

3-3-2 発話行為間に因果関係がないもの

3-3-2-1 A：サッキガタ タノンドイタ シゴト ヤッテマエタカナ。

B：ナンヤッタナ。

A：アサガタ タノンドイタ アン シゴトヤテ。

注：「ダカラ」は普通使わない。

3-3-2-2 A：キョー タナカサンニ アッタガネ。

B：ドノ タナカサンヤッタカナ。

A：キンノー ハナイトッタ サンチョーメノ タナカサンヤテ。

注：「ダカラ」は普通使わない。